
私、メリー

miffu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、メリー

【コード】

N0994U

【作者名】

miffu

【あらすじ】

平凡な日々を送っていたが、ある出来事をきっかけに少し迷惑な癖に目覚めてしまった、ある家に住んでいる女の子の話。

(前書き)

これは、フィクションです。絶対に真似しないようにしましょう。

私、メリー。ある家の一軒家に住んでいるの。

朝起きると、いつも散歩とご飯をくれるおばあさんが私を起こす。

おばあさんは私の事を嫌いと言うが、たまにおやつをくれる、大好きなおばあさんだ。

散歩を満喫して帰ると、家の中が少しうるさくなる。私のご主人とご主人の奥さんが起きたらしい。いつも、奥さんの大きな声が聞こえ、ご主人の車のエンジン音が聞こえる。そして、その娘達が起き、階段の行ったり来たりする音がする。全くもってこの家は騒々しい。ゆっくり寝たくても、騒々しくて寝ていられない賑やかな家である。

少し経つと静かになりおばあさんと二人きりになる。私の休息が訪れる。

おばあさんはたくさん濡れた物を干し終わると、家の中でガシャガシャと水の音がする。何かを洗っているのかな？私を巻きこまないで欲しいのは確かだ。

お昼まで、おばあさんを待つのが、私の楽しみ。何故かって？おばあさんのお昼ご飯さ。半分私に分けてくれる。もちろん、おやつ付きで。

そして夕方には、日課のお散歩。たまに、おばあさんの友人の家に訪問。待つ時間も嫌いじゃない。だって、すぐそばにおばあさんがいるから。

だから、家の人を待つのはけっこう嫌いじゃない。一人じゃないから。

家に着くと夕飯が待っている。おばあさん特製ねこまんま。何故か飽きない不思議な味。

こんなに良くしてくれるおばあさんを、嫌いになる要素はどこにもない。おばあさんが私を嫌いでも私は大好き。

なのに……一週間もたたないうちに、おばあさんが、急に亡くなった。

「退院したばかりだったのに……ばあちゃん……!!!」

そんな声が聞こえてくる。

おばあさん……もう二度と会えない。十年以上も一緒にいたのに、先に逝ってしまった。悲しくて、楽しみの散歩も楽しくない。ご飯も美味しく感じない。

(どうして、こんなに悲しいのか。ご飯を美味しく感じない。どうしても楽しくない。)

毎日が息苦しくなった。家の主人達も忙しくてなかなか、かまってくれない。寂しい………

でもその分、庭を駆け回る事が増えた。

気分を変えた方が良く、娘達が放してくれるようになった。鎖がない気分は楽だったけど、柵があつて外にはいけない。目の前に外が繋がっているのがわかるのに、いけない。

(悔しい！ もっと自由になりたい！！)

そう思った私は、毎日、柵を乗り越えられるよう試してみた。もちろん、ご主人達がいけない時を狙って、何度も何度も……

(とうとう、その方法を見つけた！！ 私は自由だ！)

次女が家に入るのを確認し、柵を乗り越え、走り出した。畑、そのまた奥の畑を乗り越え、走り続けた。私のいた家が小さく見える。そして、家にいた次女が慌てている。

(ざまあみる！ ここまで来れるもんなら、来てみなさい。あなたより私の方が速いんだから。)

と思っけていても最終的に捕まっけて、すごい剣幕で怒られる。私は、目をあわせない。だっけて、私は悪くないもの。ご飯がお預けになっけても、私は隙があれば、何度だっけて脱け出してみせるわ！これは、決意表明よ。

怒り疲れて、家の中に入る次女。やっぱり怒られるのは好きじゃない…少し落ち込む。

だっけて、すぐに何もなかつた様に餌をくれる。次女は気分屋かもしれない。小さい時は、下僕だと思っけていたのに最近、私をからかっけてたりするのが、気に食わない。

次女と違っけて長女は、次女より好きだ。だっけて、私の事好きっけてわかるから。たまにしか会わないだっけて、優しくしてくれる。

奥さんは、とても怖い。だから、逆らっけてちゃいけない存在。い子にしていければ、餌もくれるし、絶対服従だあ。

そして、私のご主人。怒ると怖いだっけて、私をこの家に連れて来てくれた人。私は、ご主人が大好き。会えるのがうれしくて、尻尾をたくさん振っけてしまっけて。月に一度会えるか会えないか…微妙である。

だからこそ私は、自由を求める。
今の私の生き甲斐だから。

最近、世話していった次女も忙しくなつたのか、かまっけてくれなくなつた。今こそ、脱走のチャンスだ！そして、誰も知らない私だけの冒険。

家に人がいないのを確認し、さっけてそく柵を乗り越える。まずは、おトイレをすまっけて畑で走っけて遊ぶ。そして、食べ物の散策を始める。いつも散歩は紐で繋がれるだっけて、この時は自由し放題さ。走っけて疲れると、住宅街に戻りお宅訪問。

見つけた！

「おや、メリーまた脱走してきたのかい？」

（うん！おやつ貰いにきたよ。）

「待ってて。今、おやつあげるから。」

そう所謂、おやつ巡りである。

（私の楽しみは、やっぱりこれだね！家のご飯も飽きたしね。）

「ほら、持ってきたよ。」

いつものビーフジャーキーを食べつくす。食べたら、思うがままに歩く。出会った人におやつをねだり、そして、おばあさんの知り合いの人にも挨拶がてら、おやつを貰いに歩く。そして、お腹いっぱいになったら家の前でぐっすりとお昼寝。

家の人帰るまでの私の冒険である。これだけは、やめられない。

私は、メリー。自由な犬である。

終

(後書き)

犬の気持ちを想像してみた話です。

抑圧される事は誰だって嫌だろうと思います。制限の多い犬にとって、それは、どんな思いなんだろうと、考えてみました。

処女作なので、つたない文章ですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

もしかしたら、続きを書くかもしれないので、その時良ければまたメリーに会いに来て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994u/>

私、メリー

2011年10月9日07時30分発行